

黄檗希運と南泉普願

小川 太龍

はじめに

黄檗希運（?～八五〇頃）は臨済義玄（?～八六六）の師として、南泉普願（七四八～八三四）は趙州從諗（七七八～八九七）の師としてそれぞれ禪宗史上で大きな役割を果たす。黄檗は『伝心法要』『宛陵録』を、南泉は『南泉語要』を残した。彼らの思想はそれだけで完成されたものであり、傑出した弟子を輩出した事も頷ける。

これまで黄檗について為されてきた研究は、主に『伝心法要』における思想についてである。他には、師である百丈懷海（七四九～八一四）、『伝心法要』の筆録者である裴休（七九七～八七〇）との関係に言及される程度であった。^① また、南泉についても「異類中行」「南泉斬猫」といった南泉自身の思想から考察されることがほとんどである。^② 黄檗、南泉共に、彼らの思想内容が考察の対象となることが多く、思想から離れ、伝記史料等から彼らの評価そのものに考察を加えた先行研究は少ない。そして、当然両者の関係性を考察したものは管見の限り見当たらない。

黄檗は百丈に嗣ぎ、南泉は馬祖道一（七〇九〜七八八）に嗣いだとされることは、疑う余地のないこととされる。また、同時代史料に黄檗と南泉の関係を言及したものはない。故に、黄檗と南泉に機縁の話があるものの、両者の関係に焦点を当てる意義は特に見出されてこなかった。

しかし、黄檗の伝記は不明な点が多く、師である百丈との嗣法関係も時代の要請を受けて改変が加えられたものである。³ また、『伝心法要』裴休序において黄檗の嗣法について、「百丈之子」とされるべきところが、「西堂百丈之法姪」とされ続けることにも違和感を覚える。⁴

南泉についても、灯史における評価は変化している。馬祖下で二大士と呼ばれ、筆頭とされた西堂智蔵（七三五〜八一四）と百丈に、後に南泉が加えられて三大士角立の話が作られる。⁵ また、柳田氏は『祖堂集』『伝灯録』以降、南泉の評価は高まる」と指摘する。⁶

その評価の変化する両者に、多くの機縁の話が残されている。黄檗と師である百丈との機縁の話は合計で五つであり、南泉が六つである。数に固執する必要はないが、検討の価値は十分にある。

本稿では以上の問題点から、黄檗、南泉の灯史における関係性の変遷を考察し、現在常とされている評価を再検討する。これにより、黄檗と南泉をより理解するための一助としたい。

黄檗と南泉の足跡

まず、黄檗と南泉の足跡をそれぞれ概略する。

南泉は、各史伝を通じ鄭州新鄭（河南省鄭州市新鄭市）に出生したと記される。生年は、一般的にとられる寂年から逆算して天宝七年（七四八）となる。姓は王氏であり、後に自ら「王老師」と称した。至徳二年（七

五七)に河南省鄭州市新密市東南、新鄭市西南にある大隗山⁷の大慧禪師(生没年未詳)に就き受業する。故に、
数え十にして受業したことになる。その後、大暦二年(七七七)三十にして、嵩山会善寺の嵩律師(生没
年未詳)に就き具足戒を受ける。⁸『祖堂集』以外の諸本では、初め『四部律疏』一〇巻により戒律を修めて後、

『楞伽經』『華嚴經』、「中百門觀」(『中論』『百論』『十二門論』を中心とする三論の玄義)を窮めたとされる。

しかし、経論を学ぶことにより玄妙な真理は得られないとし、⁹江西の馬祖下に参じる。馬祖は大暦四年
(七六九)には鍾陵の開元寺¹⁰(江西省南昌市新建県)に住していたとされるので、そこに参じた事になる。南
泉は馬祖下で初めて玄旨を得る事となる。

そこで南泉は、同参の帰宗智常(生没年未詳)と馬が合い、共に過ごすことが多かったようである。¹¹南泉は、
ただ馬祖の下で過ごしたのみならず、当時の禪僧が皆そうであったように道を求めて行脚を行う。¹²

その後、南泉は貞元十一年(七九五)、四十八歳にして池陽南泉山(安徽省池州市貴池区)に錫杖を留め、自
ら禪宇を構えて住山する。¹³以降三十年間、南泉山を下らずに弘法したとされる。そして、池陽の前太守であ
り、宣歙觀察使として赴任した陸亘¹⁴(七六四―八三四)が、太和の初め(八二七)、南泉山を下らしめて弟
子の礼をとり、これにより南泉山は大いに盛況したという。陸亘が宣州に移ったのは、『唐方鎮年表』卷五
には太和七年(八三三)閏七月となっている。その次の年、太和八年(八三四)十月二十一日に疾を示し、¹⁵十
二月二十五日の暁に遷化したという。¹⁶八十七歳であった。

次に黄檗の生涯を概略する。黄檗の出自は、各史伝を通じ閩県(福建省福州市閩侯県)の出身である。その
俗名については全ての伝記資料は逸しており、年寿も全ての資料は欠いているので生年を明らかにすること
が出来ない。しかし、百丈の下で共に道を求め、同時代に活躍した瀉山靈祐と仮に同年輩とすれば、瀉山靈
祐の生年は大暦六年(七七二)であるので、この頃とも考えられる。¹⁷幼くして本州、即ち郷里の福州黄檗山¹⁸

で出家する。『宋高僧伝』巻二〇には「年及就傳郷校推其慧利。乃割愛投高安黄檗山寺出家（年、就傳に及んで郷校其の慧利を推す。乃ち愛を割き高安の黄檗山寺に投じ出家す）」(T. 50, 826b)とある。「就傳」は『礼記』内則に「十年、出就外傳、居宿於外、学書計（十年にして、出でて外傳に就き、外に居宿して書計を学ぶ）」とあるので、『宋高僧伝』の説をとれば十歳という事になるだろう。黄檗の出家した福州黄檗山とは、周知のとおり、後代に隠元隆琦（一五九二—一六七三）が住した黄檗山万福寺である。

黄檗の体軀は堂々たるもので、身長は七尺あったと各史伝は伝えており、額には肉珠があったという。黄檗が福州黄檗山を後にしたのは何時のことか記されていない。福州黄檗山を出で天台に登り、後に都、即ち長安に遊び、そこで乞食行中に出会った老婆から百丈のことを聞き、百丈に参じる機となつたとされる。¹⁹『祖堂集』のみにこの老婆は、南陽慧忠に礼したと記す。²⁰これにより、百丈山（江西省宜春市奉新県）の百丈に参じることとなる。そして黄檗は百丈の下で大悟を得る。

また、黄檗の行脚の姿も残されている。管見の限り、黄檗が参じたのは百丈、南泉、南泉、塩官である。²¹先述の通り百丈との機縁の話は合計で五つ、南泉が六つ、塩官が二つである。この黄檗と南泉の機縁については本稿の中心課題として次節以降考察を加える。そして、これも月日は特定できないが、黄檗は後、南昌府高安（江西省宜春市宜豊県）の黄檗山²²に住山することとなる。そこで、裴休との出会い²³を経て会昌（八四一—八四六）の廢仏に遭い、弟子の千頃楚南（八一三—八八八）と林谷に逃れたとされる。²⁴そして大中二年（八四八）に裴休に再び請われ宛陵の開元寺に招来されたという。²⁵逃れていた場所は明記されていない為、特定が出来ない。会昌の廢仏を迎えた鍾陵近郊か、それとも宛陵辺であろうか。

最後は本山とあるので黄檗山に戻つたとされる。²⁶寂年については諸説があり、現段階ではどれも仮説の域を出ない。よって、黄檗の示寂は大中年間（八四七—八五九）であり、裴休の序に信を置くならば大中二年

(八四八)以降となる。

黄檗と南泉の機縁

前述したように、黄檗と南泉の間には合計六つの機縁の話が残されている。また、直接の対話は無いが、伝聞した黄檗の話に南泉が評唱するという話、馬頭峯神蔵(生没年未詳)の上堂に南泉が著語し、それを黄檗が評する話が残されている。黄檗と南泉の機縁の話は、管見の限り『伝灯録』までで全て出揃う。後代において機縁の話を挙似した者の著語、評唱等が付されることもあるが、主たる機縁部分は『五灯会元』までで字句も固定化される。故に、本稿で扱う資料は『五灯会元』迄とする。以下に機縁の話が収録されている資料を挙げ、巻数の後ろに本稿で考察する順に①～⑥まで番号を打つ。著語・評唱があるものは白抜きにする。(著語・評唱が付されるもので前出と異なるものは斜体の白抜きとする。)

- 九五二年(広順二) 『祖堂集』 (十六) 南泉章①②③⑤④
- 一〇〇四年(景德元) 『景德伝灯録』 (八) 南泉章③⑤②
- 一〇三六年(景祐三) 『天聖広灯録』 (八) 黄檗章③①②④
- 一〇八五年(元豊八、序) 『四家語録』 (二) 黄檗章③①②④
- 一一三三年(紹興三以前) 『宗門統要集』 (四) 黄檗章①③②⑤④
- 一一八三年(淳熙十) 『宗門聯灯会要』 (七) 黄檗章①③②⑤④
- 一二五二年(淳祐十二) 『五灯会元』 (三) 南泉章③⑤② (四) 黄檗章④⑥①

以上に列挙したものと見ると、系統が容易に理解できる。『祖堂集』のみが単独であり、他は『伝灯録』『広灯録』『宗門統要』に編纂されるものどれかを踏襲している。以上を踏まえ以下に黄蘗と南泉の機縁に考察を加える。

一

『祖堂集』卷一六 (595～596) 南泉章

師問黄蘗、笠子太小生。黄蘗云、雖然小、三千大千世界惣在裏許。師云、王老师你。黄蘗無對。後有人舉似長慶。長慶代云、欺敵者亡。保福代曰、泊不到和尚此間。

師、黄蘗に問う、「笠子ちい太小生ちいさし」。黄蘗云く、「小なりと雖然いへども、三千大千世界、惣すべて裏許に在り」。師云く、「王老师は你は」。黄蘗無對。後に人有りて長慶に挙似す。長慶代わつて云く、「敵を欺あざむる者は亡なず」。保福代わつて曰く、「泊あやうく和尚が此間に到らざらんとす」。

『伝灯録』卷九 (137a) 黄蘗章

師辭南泉、門送提起師笠子云、長老身材勿量大、笠子太小生。師云、雖然如此、大千世界惣在裏許。南泉云、王老师你。師便戴笠子而去。

師、南泉を辞するに、門送し師の笠子を提起して云く、「長老の身材、勿量大なるに、笠子かぶただ小生ちいさし」。師云く、「此の如くなりと雖然すべも、大千世界は惣すべて裏許に在り」。南泉云く、「王老师は你は」。師便ち笠子を戴かぶりて去く。

『広灯録』卷八 (411b) 黄蘗章

師一日出次、南泉云、如許大身材、戴箇些子大笠。師云、三千大千世界摠在裏許。南泉云、王老師吟。師戴笠便行。

師、一日出でる次いで、南泉云く、「許かくの如き大身材なるに、箇の些子の大笠を戴る」。師云く、「三千大千世界は摠はて裏許はに在り」。南泉云く、「王老師吟は」。師笠を戴りて便ち行く。

これは、黄檗の堂々たる体軀と笠の小ささを対比した、全ての資料に記載される話である。右には、『祖堂集』『伝灯録』『広灯録』にそれぞれ収録される話を挙げた。他の資料に収録のものは、『伝灯録』もしくは、『広灯録』のものに準じている。内容は、ほぼ同じであるが、嚴密には三つの違った立場が取られていると考えられる。

まず『祖堂集』に収められる話についてであるが、『祖堂集』の話にのみ長慶慧稜（八五四～九三二）・保福從展（？～九二九）の著語が付される。この著語は、南泉と黄檗だけのものではない。長慶の著語「28欺敵者亡」は、『伝灯録』巻一一靈樹如敏章に記される如敏と尼との話に付される保福の著語と同じである。また、保福の著語「29洎不到和尚此間」は、『祖堂集』巻一一保福章、同巻一五東寺章で、東寺と南泉の話に付される保福の著語と同じである。また、『伝灯録』以降、慧忠章にも慧忠と南泉の話として、先の東寺と南泉の商量と全く同じ内容が記され、保福により「30幾不到和尚此間」と、ほぼ同じ著語がなされる。これらの著語は、使用される場面は当然違うが、共通する点がある。それは、返者が「無対」という様に、答を發しない時に代わって付される著語である、ということである。『祖堂集』以外のこの話に著語が付けられない理由の一つとして、黄檗が「無対」ではない、ということが考えられる。

『祖堂集』以外の資料において、黄檗は南泉の「31わし（王老師）はどうか」という問いに、笠を戴り行く

のである。最後のこのはたらきが描かれることによって、黄檗の姿は全く違ったものになっている。また、『祖堂集』のみ、黄檗の偉丈夫である姿が描かれていない。³¹他の資料においては、「長老身材勿量大」³²「如許大身材」という様に、黄檗の堂々たる身長を云い、笠の小さを際立たせる。

次に、この問答が何時為されたかという点で、立場が全く異なっている。『祖堂集』には何の記述もない。『広灯録』等でも、「師一日出次」とされるのみで、この話が何時為されたか明記されていない。しかし、『伝灯録』等では、「師辞南泉、門送提起師笠子云」と、南泉を辞去する時の逸話とされている。これは、南泉と黄檗の数ある機縁の最後に記載されていることから、理解することが出来る。

以上により、この話は三つの違った立場からそれぞれ描かれていることが理解出来る。一つには、『祖堂集』に表される、まだ修行の道程にある黄檗の姿である。『祖堂集』では、黄檗は堂々たる体軀であることも描かれず、南泉の問いに得意に応じるも、重ねられた問いに答える事が出来ない。そのような不足があったからこそ、長慶、保福が著語を為すのである。

次に、『伝灯録』等に表される南泉の下を去る、大悟徹底した黄檗の姿である。機縁中に示されるように、南泉を辞する時の南泉との最後の対話である。南泉の追問に、堂々たる偉丈夫の黄檗は颯爽と笠を被り去り行く、という行動により応じる。いかにも作家の弟子と、師の最後に相応しい姿である。

最後に、『広灯録』等にもみられる先の話から修飾句を除いた、南泉下でのある日の黄檗の姿である。内容は『伝灯録』等と変わらないが、簡素な表現で記されており、劇的な師との別れの日ではなく、師と弟子の日常の一コマに感じられる。

『祖堂集』卷一六(598) 南泉章

師問黄蘗、定慧等學明見佛性、此理如何。黄蘗云、不依一物。師云、莫便是長老家風也無。蘗云、不敢。師云、漿水錢則且置、草鞋錢教阿誰還。

師黄蘗に問う、「定慧等しく学して明らかに仏性を見る、此の理如何ん」。黄蘗云く、「一物に依らず」。師云く、「便ち是れ長老が家風なること莫しや」。蘗云く、「不敢」。師云く、「漿水錢は則ち且く置く、草鞋錢は阿誰をしてか還わしめん」。

『広灯録』卷八(411b) 黄蘗章

師一日在茶堂内坐。南泉下來問、定慧等學明見佛性。此理如何。師云、十二時中不依倚一物。泉云、莫便是長老見處磨。師云、不敢。泉云、漿水錢且置、草鞋錢教什磨人還。師便休。滄山後舉此因緣、問仰山、莫是黄蘗構他南泉不得磨。仰山云、不然、須知黄蘗有陷虎之機。滄山云子見處、得與磨長

師一日、茶堂の内に在つて坐る。南泉下り來つて問う、「定慧等しく学して明らかに仏性を見る。此の理如何ん」。師云く、「十二時中一物にも依倚せず」。泉云く、「便ち是れ長老が見處なること莫しや」。師云く、「不敢」。泉云く、「漿水錢は且く置く、草鞋錢は什磨の人をして還わしめん」。師便ち休す。滄山後に此の因縁を舉げて、仰山に問う、「是れ黄蘗の他の南泉を構すること得ざることを莫しや」。仰山云く、「然らず、須く黄蘗に陷虎の機あることを知るべし」。滄山云く、「子が見處、与磨に長ずることを得たり」。

この話も本稿で挙げる資料全てに記載があり、『伝灯録』等は『祖堂集』にほぼ準じている。この話は、

『涅槃經』卷二八「師子吼菩薩品」(T. 12, 792c)「諸佛世尊定慧等故、明見佛性」の語に典拠があり、『六祖壇經』定慧第四(T. 48, 352c)でも次のように取り上げられる。

師示衆云、善知識、我此法門以定慧為本。大衆勿迷言定慧別。定慧一体不是二。定是慧體、慧是定用。即慧之時定在慧。即定之時慧在定。若識此義即是定慧等等。

師衆に示して云く、「善知識、我が此の法門は定慧を以って本と為す。大衆は迷つて定慧は別なりと言うこと勿れ。定慧は一体にして是れ二ならず。定は是れ慧の体にして、慧は是れ定の用なり。即慧の時、定は慧に在りて、即定の時、慧は定に在り。若し此の義を識らば即ち是れ定慧等しく学するなり」。

禪定と智慧を、法門の根本とするという極めて重要な主張である。これは当然、南泉、黄檗のみならず、当時の禅僧達もこの問題を扱った問答を為している⁽³³⁾。

この話は、『広灯録』では茶堂での事であつたされる。また『広灯録』等の話では、黄檗が南泉の語を打ち切つたことと、その後の瀉仰の評唱が付される。この付加より、この話に対する理解が変化する。また、『宗門統要』巻四(90b)黄檗章等では瀉仰の語の後に、

保福展云、若無瀉仰、埋没著黄檗。五祖戒云、仰山大似爲蛇畫足。

保福展云く、「若し瀉仰無くんば、黄檗を埋没す」。五祖戒云く、「仰山大いに蛇の為に足を画くが似し⁽³⁴⁾」。

というように『広灯録』等の立場を受け、保福と戒和尚の著語が付される。

『祖堂集』等、評唱が付されないものでは、南泉の黄檗への一語で締めくくられる。内容を見れば、南泉の「禪定と智慧を等しく学ぶことによって明らかに仏性を見る、ということとは、どのようなことか」という問い掛けに、黄檗は、「何ものにも（定慧にも）依存しないことだ」と応じる。南泉は、「それがお前の見処、家風なのだ」と念を押す。黄檗はその言葉に「どう致しまして」と答える。この答えは、文脈から謙遜では無く、自負の意が滲んでいると取るべきであろう。³⁴南泉は、その得々とした黄檗に、「飲食代は仕方ないとして、その見処を提するに費やした修行、行脚の費用は誰が代弁するのか」と、その見処ではまだ及ばない、³⁵と叱咤する。以上が『祖堂集』等、瀧仰の評唱がないものの表面的な解釈になる。最後の南泉の語は、黄檗を全面的に肯っているように見え、この話は、黄檗の機が未だ純熟していない時のものである。少なくとも、『祖堂集』『伝灯録』のようにこの話が南泉章に収録されているものでは、そのような評価を下していると考えられる。

しかし、瀧仰の評唱を付するものは、この話をまた違った視点から評している。南泉の語に黄檗は休する。そして、瀧山がこの因縁を挙げて仰山に、「黄檗は、南泉の真意を得る事が出来なかったのだろうか」と、問いかける。これは、黄檗の「休」から、全体を問題にしているのである。それに仰山は、「そうではない。黄檗には、虎を穴に陥れるような大力量があることを知らねばならない」と、答える。それは、この「休」は勿論、問答全体の主導は、実は黄檗にあったのだと云うのである。それに対し瀧山は、「お前の見処は成長している」と、仰山を肯い賛する。

また、『宗門統要』等では、それを受け、黄檗の評価を決定づけている。³⁶本稿では、「定慧等学明見仏性」という思想内容に立ち入り考察することはしないが、この話に評価の変化があることは確かである。それも、百丈と黄檗の関係性を深く繋げる役目を担った同じ瀧仰の評唱が付されることによることは注目に値する。³⁷

次に挙げる機縁の話も本稿で扱う資料全てに収録される話である。

『祖堂集』卷一六(598)南泉章

師又問、長老什摩年中受戒。藥云、威音王佛同時受戒。師云、威音王佛是我兒孫。黄蘗却問和尚、什摩年中受戒。師云、這後生莫礼。黄蘗無對。

師又問う、「長老什摩いずれの年中にか受戒せる」。藥云く、「威音王仏と時を同じうして受戒せり」。師云く、「威音王仏は是れ我が兒孫なり」。黄蘗却つて和尚に問う、「什摩の年中にか受戒せる」。師云く、「這の後生礼莫し」。黄蘗無對。

『伝灯録』卷八(117b～118a)南泉章

師一日捧鉢上堂。黄蘗和尚居第一坐、見師不起。師問云、長老什摩年中行道。黄蘗云、空王佛時。師云、猶是王老師孫在、下去。

師一日鉢を捧げて上堂す。黄蘗和尚第一坐に居り、師を見るも起たず。師問うて云く、「長老は什摩の年中にか行道せる」。黄蘗云く、「空王仏の時なり」。師云、「猶お是れ王老師が孫なり、下り去れ」。

『広灯録』卷八(411b)黄蘗章

師行脚時到南泉。一日齋時捧鉢向南泉位上坐。南泉下來。見便問、長者什摩マヤ年中行道。師云、威音王已前。南泉云、猶是王老師孫在。師便移下座

師行脚の時南泉に到る。一日齋時、鉢を捧げ南泉の位上に坐す。南泉下り来る。見て便ち問う、「長者は什磨いずれの年

中にか行道せる」。師云く、「威音王已前」。南泉云く、「猶お是れ王老師の孫なり」。師便ち下座に移る。

『宗門統要』卷四 (90a) 黄檗章

師在南泉會、為首座。一日捧鉢、向南泉位中坐。泉入堂、見乃問、長老甚年中行道。師云、威音王已前。泉云、猶是王老師孫、下去。師過第二位坐。泉休去。滄山云、欺敵者亡。仰云、不然。須知黄檗有陷虎之機。滄山云、子見處得與麼長。雪竇云、可惜王老師。只見錐頭利。我當時若作南泉、待伊道威音王已前、即便於第二位坐、令黄檗一生起不得。雖然如此、也須救取南泉。雲峰悅云、後來叢林中多有商量。或道、黄檗有陷虎之機、南泉有煞虎之威。若作與麼說話、誠實苦哉。殊不知、這老賊有年無德。喫飯坐處、也不依本分。若雲峯門下、說甚威音王已前、王老師更大。直須喫棒了趁出。

師南泉の會に在つて、首座と為る。一日鉢を捧げ、南泉の位中に坐す。泉入堂し、見て乃ち問う、「長老は甚いずれの年中にか行道せる」。師云く、「威音王已前」。泉云く、「猶お是れ王老師が孫なり、下り去れ」。師第二位に過ぎ坐す。泉休し去る。滄山云く、「敵を欺る者は亡ず」。仰云く、「然らず。須く黄檗に陷虎の機有ることを知るべし」。滄山云く、「子が見處、与麼に長ずることを得たり」。雪竇云く、「惜しむ可きは王老師なり、只だ錐頭の利なるを見ろのみ。我れ當時若し南泉と作らば、伊かれの『威音王已前』と道うを待つて、即便すなわち第二位に坐し、黄檗をして一生起ち得ざらしむ。此の如くなりと雖然も、也た須く南泉を救取すべし」。雲峰悅云く、「後來の叢林中に多く商量有り。或るひと道く、『黄檗に陷虎の機有り、南泉に煞虎の威有り』と。若し与麼の說話を作さば、誠に実に苦なる哉。殊に知らず、這の老賊に年有つて、徳無きことを。飯を喫し坐する處、也た本分に依らず。若し雲峰門下に、甚の『威音王已前』と説かば、王老師更に大はなはだし。直須すべからず棒を喫し了つて趁出すべし」。

この話の芯となる部分は、次の如くである。南泉が黄檗へ「何時受戒をしたのか」と問う。それに黄檗が、

「威音王仏(空王仏)と同じ、もしくはそれ已前」と応じる。威音王已前(空王已前)は、定型語であり、これ以上遡ることの出来ない過去である。しかし、南泉はそれを好しとはせず、「威音王仏などわしの孫ほどだ」と喝破する。

この他の部分に、語句の異同が見られ、各々状況、立場に相違が生じている。『祖堂集』では、時、場所は分からず、ただ問答のみが描かれる。『伝灯録』では、文脈から南泉が鉢を捧げての上堂での話。『広灯録』では、齋時、即ち正午の食事の時の話であり、鉢を捧げるのは黄檗で、食堂での話となる。『宗門統要』では、ある一日の話となるが、内容から先の『広灯録』と同じ齋時の話であると推測される。ここでは黄檗は南泉下の首座である。

そして、南泉の一語の後の対応に大きな違いが生ずる。『祖堂集』において黄檗は、続けて「では和尚はいつ受戒したのか」と返問する。それに対し南泉は、「這後生莫礼」と「この未熟者、礼がなっておらん」と一喝する³⁸。その一喝に黄檗は、返す言葉が無い。『伝灯録』では、上堂する南泉を見て、第一座より立たない黄檗に向けて為された問答である。この話を締めくくるのは、南泉の「下り去れ」である。『広灯録』では、食堂で南泉の坐るべき座に坐っていた黄檗との問答である。黄檗は、南泉の一語により自ら下座へ移る。『宗門統要』では、首座³⁹と明記された黄檗の『広灯録』と同じ状況での問答である。しかし、南泉の一語の後、黄檗は第二座に坐る。それに対し南泉は、「師便休」と黄檗が南泉を下したかのようなようである。そして、それに続き瀉山の著語が付される。この著語は、本稿「一」で考察した『祖堂集』に、収録される機縁に長慶が付した著語と同じである。その後、これも本稿「二」で考察した『広灯録』に、付される瀉仰の評唱と全く同じものが加えられる。その上、雪竇重頭(九八〇〜一〇五二)、雲峰文悦(九九八〜一〇六二)の評価も付される。ここに付される評唱を見れば一目瞭然であるが、黄檗が高く評価されている。

『祖堂集』の話は、他と趣が異なるが、『伝灯録』以降、内容が増補されていることが容易に理解出来る。『祖堂集』の話は、南泉章に収録されていることから、師である南泉の力量が強調されており、黄檗に重点は置かれていない。しかし、『伝灯録』以降、黄檗のはたらしき、そして南泉の休す様が追補される。『宗門統要』に至っては、他の機縁に付された瀉仰の評唱、雪竇・雲峰が露骨に南泉を下す評が加えられる。収録される資料により立場が異なり、作為的な改変がなされていることが如実に理解出来る。

四

『祖堂集』卷一六(601~602)南泉章

師問黄蘗、去什摩處。對云、擇菜去。師云、將什摩擇。黄蘗豎起刀子。師云、只解作客不解作主。自代云、更覓則不得。有僧拈問長慶、与古人作主如何道。長慶便咄之。僧拈問順德、南泉見黄蘗去什摩處意旨如何。順德云、也是黄蘗招致得。僧云、只如黄蘗後与摩栢つゝ對南泉還得也無。徳云、且自付則得。僧云、只如對南泉作摩生道。徳云、汝作南泉来。僧云、將什摩擇。徳放下刀。

師、黄蘗に問う、「什摩処にか去く」。對えて云く、「菜を扱つかびに去く」。師云く、「什摩を將つかつてか扱つかぶ」。黄蘗、刀子を豎起す。師云く、「只だ解く客と作るのみにして主と作る解わず」。自ら代わつて云く、「更に見むれば則ち得ず」。僧有りて拈じて長慶に問う、「古人の与に主と作らんには如何が道わん」。長慶便ち之を咄す。僧拈じて順徳に問う、「南泉、黄蘗を見し什摩の処にか去くの意旨如何」。順徳云く、「也た是れ黄蘗の招致し得たり」。僧云く、「只だ黄蘗の後に与摩に南泉に栢つゝ對せる如きは還た得たりや」。徳云く、「且く自から付せば則ち得たり」。僧云く、「只だ南泉に對えるが如きは作摩生か道わん」。徳云く、「汝、南泉に作り来れ」。僧云く、「什摩を將つかつてか扱つかぶ」。徳、刀を放下す。

『伝灯録』卷九(137a) 黄檗章

師在南泉時、普請擇菜。南泉問、什麼處去。曰、擇菜去。南泉曰、將什麼擇。師、舉起刀子。南泉云、只解作賓、不解作主。師扣三下。

師、南泉に在りし時、普請して菜を扱ぶ。南泉問う、「什麼の処にか去く」。曰く、「菜を扱び去く」。南泉曰く、「什麼を將つてか扱ぶ」。師、刀子を举起す。南泉曰く、「只だ解く客と作るのみにして、主と作る解わず」。師扣くこと三下す。

この話も、本稿で挙げる資料全てに記載があり、『伝灯録』以降、後述の部分以外、大きな変化は見られず、『祖堂集』のみ長慶、順徳によるこの話を題材にした商量が続けられる。この話は、「主客」「分別」を主題としたものであり、入矢氏・古賀氏の指摘にあるように、『龐居士語録』に収録される龐居士(〜八〇八)と松山(生没年未詳)の話を踏まえていると考えられる。⁽⁴⁰⁾

「扱菜」とは、菜の葉の青い部分だけを取り、黄色いものは捨てることをいう。⁽⁴¹⁾ 作務という日常に内包される、分別、差別を題材に南泉が問いかける。それに黄檗は、包丁を持ちあげ体を持って示す。しかし、南泉は「只解作客不解作主」と、それでは菜を扱ぶ主体が見えぬ、と詰め寄る。ここまでは、各資料同様であるが、以下に違いが生じる。

『祖堂集』では、南泉が自ら代わって「更覓則不得」と見処を示す。その後、長慶と順徳にある僧が挙似し、それぞれ黄檗に代わり「主」を提示する。『祖堂集』では、黄檗は「主」を示すことが出来ず南泉に導かれる。故に、それが後に問答の題材となるのである。また、順徳は、実はこの商量は、黄檗から仕掛けたものだという。そうであれば、『祖堂集』では黄檗は、全く南泉に下されていることとなる。

しかし、他の資料では状況が変化する。各資料大きな字句の異同はなく、南泉の一語の後、黄檗は「師扣三下」と包丁を三度たたき、包丁を使いこなす自己という「主」を提示する。南泉の追尋に難なく答えるのである。さらに『五灯会元』では、「大家扱菜去（みな菜を扱びに行け）」と南泉はそれを肯うかのように結ぶ。『祖堂集』以外、黄檗の評価は、一致して向上していると言える。

五

『祖堂集』卷一六（598～599）南泉章

師又問、白銀為地、黄金為壁。此是什麼人居止處。藥云、聖人居止處。師曰、更有一人、居什麼處。藥云、我則道不得。師云、王老师却道得。藥云、便請道。師云、王老师罪過。

師又た問う、「白銀を地と為し、黄金を壁と為す。此は是れ什麼の人の居止する処なりや」。藥云く、「聖人の居止する処なり」。師曰く、「更に一人有り、什麼の処に居するや」。藥云く、「我れ則ち道い得ず」。師云く、「王老师却つて道い得たり」。藥云く、「便ち道うを請う」。師云く、「王老师が罪過なり」。

『伝灯録』卷八（118a）南泉章

師一日問黄蘗、黄金爲世界、白銀爲壁落。此是什麼人居處。黄蘗云、是聖人居處。師云、更有一人、居何國土。黄蘗乃叉手立。師云、道不得何不問王老师。黄蘗却問、更有一人、居何國土。師云、可惜許。

師一日、黄蘗に問う、「黄金を世界と為し、白銀を壁落と為す。此は是れ什麼の人の居する処なりや」。黄蘗云く、「是は聖人の居する処なり」。師云く、「更に一人有り、何れの国土に居するや」。黄蘗乃ち叉手して立つ。師云く、「道い得ざれば何ぞ王老师に問わざる」。黄蘗却つて問う、「更に一人有り、何れの国土にか居するや」。師云く、

「可憐許」。

この話は、『伝灯録』等には収録されていない話である。凡聖という題材から差別を問う話であり、本稿「四」の話と通ずる点がある。

『祖堂集』では、白銀を地、即ち世界と為し、黄金を壁、即ち住まいとし、それ以外では、黄金を世界、白銀を住まいとしている。これは、『大智度論』卷三二（T. 25, 302b）に「東方有国、純以黄金為地。彼仏弟子、皆是阿羅漢。……東方有国、純以白銀為地。彼仏弟子、皆学辟支仏道（東方に国有つて、純ら黄金を以つて地と為すなり。彼の仏弟子、皆な是れ阿羅漢。……東方に国有つて、純ら白銀を以つて地と為すなり。彼の仏弟子、皆な辟支仏の道を学ぶ）」と、ある。

黄金、白銀の字句の入れ替わりはあるが、南泉が、物質的且つ在俗的豪華な世界に住するものは誰か、を黄檗に問う。黄檗は、聖人であると答える。それを踏まえ南泉は、では、「更に一人有り」即ち、そのような凡聖といった差別を超えた者は、どこに住するのか、と重ねて問う。ここから字句の異同が見られる。

『祖堂集』では、黄檗は「言うことが出来ない」と答える。それを受けて南泉は、「わしなら言う事が出来る」と答える。「それならどうぞ一句お願いします」という黄檗に南泉は、「わしが悪かった」と話を締めくくる。⁽⁴⁾

『伝灯録』等では、黄檗は又手にて立つ。即ち即今当処がそこである、と体现するのである。それを南泉は、「言えないならば、なぜ聞かぬ」と言葉で示すことを迫る。そこで黄檗は、同じ言句を問い返す。それに対し南泉は「おしい」とする。⁽⁵⁾

『祖堂集』では、黄檗は「道不得」と、見解を呈することを拒否、或いは答に窮しているように見える。

『伝灯録』等では、体を持つて見処を示しており、黄檗の姿が違って見える。しかし、どちらの応答にも南泉は、自らに問わしめようとす。即ち、黄檗の見処はどちらも同等のものであり、好しとはされない。そして、黄檗は南泉と主客を転じようと問いを発するが、それも、南泉の導きに沿うものではない。故に、「王老師罪過」「可惜許」と嘆息するのである。どちらも、黄檗を導くことが出来ていない南泉の自省の念が含まれていると読み解ける。⁽⁴⁶⁾この話は字句の異同が見られるが、内容的にはほぼ同義である。しかしながら、『伝灯録』等に収録されるものの方が、理解が容易である。また、到らぬ点では同様であるが、見処を呈しており、表面的な黄檗像が改良されている。

六

『伝灯録』卷九 (137a) 黄檗章

一日南泉、謂師曰、老僧偶述牧牛歌。請長老和。師云、某甲自有師在。

一日南泉、師に謂いて曰く、「老僧偶たま牧牛歌を述ぶ。請う長老の和せんことを」。師云く、「某甲それがしに自ら師有るなり」。

この話は南泉と黄檗の因縁話中において異質であり、収録されている資料が少ない。この話は『伝灯録』から追加されるが、『広灯録』には見えない。また、字句の異同はほぼ無い。

周知の如く南泉には「異類中行」の語があり、彼は度々話中に水牯牛を持ち出す。南泉は上堂において「祖佛不知有、狸奴白牯却知有（祖仏は有るを知らず、狸奴白牯却って有るを知る）」（『祖堂集』卷一六、587）と説き、遷化に臨み「向山下檀越家作一頭水牯牛去（山下の檀越家において一頭の水牯牛と作り去く）」（『祖堂集』

卷一六、590) という。

牛は知られるように禪家において良く題材として使用され、後に『十牛図』等で明確になるように心、本具の仏性の喩えとして使用される。この「牧牛歌」とあるのも当然、同時代の禅匠達と同様に使用したものであり、不思議はない。しかし、南泉においては、特に「牛」に意があると解すことが出来る。

南泉は、親しみと敬意を込め黄檗を「長老」と呼び、自らが作した牧牛歌に酬和することを求める。それに対し黄檗は、「私にはもともと師がおります」と応えるのである。これこそが、黄檗の和した牧牛歌である、云えるのかも知れないが、深くこの語の真意を探ることを今は置く。虚心にこの語を見るならば、ただ南泉の歌に和することをせず、自らに元来師があることを伝えているのである。この話が収録される資料では、この次の話が南泉を辞するものである。これを踏まえ、南泉の牧牛歌に和することは、法系を継ぐこととであり、それをせず百丈下であることを宣言している、と解釈することは飛躍し過ぎているだろうか。少なくとも、この話で南泉が黄檗を明確に認めていることは真実である。後代、この話が収録されるにあたり、内容に変化のある字句の異同はない。

また、『広灯録』卷一五(475b) 風穴章に牧牛歌を和す、この話と全く同じ流れで、風穴延沼(八九六〜九七三)と守廓(生没年未詳)の話が収録されている。この時、風穴は酬和している。⁽⁴⁷⁾

七

『祖堂集』卷一(441〜442) 睡龍章

有俗官、問黄蘗供養主、黄蘗和尚驢馬相似。上座、作供養主作什麼。僧無對。却歸舉似黄蘗。黄蘗云、道薄人微甚是難消。有人舉似南泉。南泉云、池州麻黄・蜀地當歸。有人舉似師。師云、泉州葛布、好造

汗衫。

俗官有りて、黄蘗の供養主に問う、「黄蘗和尚は驢馬に相い似たり。上座、供養主と作りて什摩をか作す」。僧無対。却歸かえりて黄蘗に拳似す。黄蘗云く、「道薄く人微にして甚だ是れ消いること難し」。人有りて南泉に拳似す。南泉云く、「池州の麻黄・蜀地の当帰」。人有りて師に拳似す。師云く、「泉州の葛布、汗衫を造るに好し」。

『伝灯録』卷八 (127a) 磁州馬頭峯神藏章

上堂謂衆云、知而無知、不是無知而説無知。南泉云、恁麼依師道、始道得一半。黄蘗云、不是南泉駁他、要圓前話。

上堂し衆に謂いて云く、「知にして無知なりとは、是れ無知にして無知と説くにはあらず」。南泉云く、「恁麼かく師に依つて道いて、始めて一半を道い得たり」。黄蘗云く、「是れ南泉が他を駁するにはあらず。前話を円ならしめんと要するなり」。

最後に挙げるこの二つの話は、南泉と黄蘗二人の直接の因縁話ではない。先の話は『祖堂集』のみに収録され、黄蘗下の街坊化主と黄蘗の話を、南泉が聞いて評唱するという構成である。後の話は、『伝灯録』等に収録され、神藏の上堂の語に対する南泉の評価と、その南泉の意をさらに黄蘗が解説するという構成である。今、内容に立ち入り考察を加えることはしない。これらの話から得るべき本稿で必要なことは、南泉と黄蘗を繋げる話が存在している、ということであり、黄蘗の師である百丈との間には、このような話が残されていないことである。

これが史実に基づくことであつたならば、黄蘗が南泉下を去つた後も、このような話が残されるような交

際があり、先の考察で南泉が黄檗を「長老」と呼んだことと合わせて関係の密であったことが理解できる。黄檗が歴参した禅匠達との間にはこのような話は残されておらず、瀉仰のような師弟の濃密な様を彷彿とさせる。

また、黄檗と南泉には非常に似通った話が残されている。長文の為、全文を挙げることはしないが、冥界より、南泉は自下の雲納、黄檗は裴休を、大喝により呼び戻す神異譚である。⁴⁸両話とも非常に構成が似通っており、『祖堂集』にしか収録されておらず、管見の限り、他にこの話の流れで、両話ほど似ているものは見られない。

おわりに

『祖堂集』の持つ特性に拠るものでもあろうが、『祖堂集』において黄檗が南泉に認められている姿は描かれぬ。しかし、『伝灯録』以降、黄檗の評価は向上する。これは、黄檗と南泉の機縁に付される著語、評唱からも理解出来る。『祖堂集』に付されるものは、未熟な黄檗に代わつてのものであった。しかし、『祖堂集』以外のものは、露骨に黄檗を称賛するものであり、一義的な評価の方向性を示唆する。

この黄檗の評価向上に、南泉が利用されていることは、本論により明確になった。しかし、同様に黄檗の評価向上の為、改変利用された百丈との機縁と比べると、異なる視点で編まれたことが窺える。

本論で考察したように、黄檗と南泉の機縁の数は、『伝灯録』の時点で既に、六つと出そろい、百丈とのそれよりも多い。黄檗と百丈の機縁は、『祖堂集』に収録されるものは一つのみであり、『伝灯録』に収録されるものは三つ。『広灯録』に到り五つに増加されている。しかし、黄檗と南泉の機縁は、『広灯録』におい

て南泉章は立てられず、『五灯会元』のものは、『伝灯録』の焼き直しである。黄檗と百丈の機縁は、『広灯録』において完成し、『五灯会元』における機縁は、『伝灯録』を踏襲しながらも、変更が見られる。

南泉を黄檗の評価向上に利用していることは、事実である。しかし、史伝編纂にあたり時代が下るにつれ、師弟の間柄から当然であるかも知れないが、南泉ではなく、百丈との関係により黄檗の評価を高めようとする意図が見える。これは、黄檗と百丈の機縁が百丈を飛び越え馬祖に嗣ぐという作意の元、馬祖の正系ならしめんが為に改変されたものであったことから裏付けられる。⁴⁹⁾

このように、黄檗と南泉・百丈との機縁は質が異なる。しかし、黄檗と南泉の機縁は、黄檗評価向上の露骨な作為が行われる前からその数は確定し、黄檗が南泉を、南泉が黄檗をそれぞれ評する話が二つ残されていることは、注目に値する。これは、評価の修飾とは関係なく、黄檗と南泉の關係の並々ならぬものであることが理解出来る。むしろこれだけ見れば、黄檗と南泉の關係は、『伝灯録』の時点で百丈よりも密であるように感じられ、『伝心法要』裴休序の「西堂、百丈之法姪」という記述も強ち誤記とは言えない程である。

また、会昌の廃仏の後、黄檗は裴休に、逃れていた山から、宛陵（安徽省）の龍隆寺に請われた。この時、黄檗は鍾陵、黄檗山付近（江西省）に逃れていたのだろうか。推測の域は脱し得ないが、黄檗は南泉下で過ごしており、その縁により池州、宣州辺（安徽省）に逃れていた。だからこそ、裴休は黄檗を宛陵に招来し得た。と、両者の關係からこのように推察することが可能である。

以上の評価、仮説は飛躍したものであるかもしれないが、本論考を通じ、少なくとも、現在為されている黄檗と南泉の關係を見直し検討する必要がある、十二分にあると結論付けることが出来る。今後この問題に対して、より詳細な史料研究と合わせ、思想から考察することが必要である。また、灯史の編纂された時代背景、両者の周辺から考察することも課題とする。

略号・略記

本稿で使用した、テキストと略号を次に挙げる。

『祖堂集』 禅文化研究所編『祖堂集』 禅文化研究所、一九九四年（大韓民国海印寺蔵）

『景德伝灯録』 禅文化研究所編『景德伝灯録』 禅文化研究所、一九九〇年（東寺蔵福州東禪寺版） 本稿中では『伝灯録』と略記する。

『天聖広灯録』 柳田聖山編『宋蔵遺珍 宝林伝・伝灯玉英集、附録・天聖広灯録』 禅学叢書之五、中文出版社、一九七五年（知恩院蔵福州開元寺版） 本稿中では『広灯録』と略記する。

『宗門統要集』 柳田聖山・椎名英雄編『禅学典籍叢刊』 第一巻収録『宗門統要集』 臨川書店、一九九三年（東福寺蔵宋版） 本稿中では『宗門統要』と略記する。

以上を使用し（ ）内に頁数を記す。

注

(1) 須山長治「黄檗希運の語録 百丈懷海との機縁」『印度学仏教学研究』(三三―二) 一九八五年。柳田聖山「黄檗希運と裴休の『伝心法要序』」『四家録と五家録』『禅文献の研究』

上」所収、法蔵館、二〇〇一年。拙稿「黄檗希運の嗣法について」『禅学研究』(八八) 二〇一〇年。拙稿「黄檗希運と会昌の廃仏」『禅学研究』(九〇) 二〇一二年

(2) 原田憲雄「南泉斬猫」『京都女子大学人文論叢』(二二) 一九七四年。原田弘道「仏行と罪相——『南泉斬猫』話を資縁として——」『駒沢大学仏教学部論集』(二七) 一九八六年。

沖本克己「異類について」『禅文化研究所紀要』(二五) 一九八八年。沖本克己「南泉斬猫」花園大学研究紀要(二二) 一九九〇年。新井勝竜「異類中行について」『宗学研究』(三三) 一九九二年。唐代語録研究会第二班注「南泉語要」第

一則上堂訳注』『禅文化研究所紀要』(一九) 一九九三年。常磐義伸「南泉の異類中行と楞伽經の兎角牛角」『松ヶ岡文庫研究年報』(二五) 二〇一一年。

この他に、趙州・臨済の思想との関係から論じられた論考として、平野宗浄「南泉と趙州」『印度学仏教学研究』(二〇) 一九七一年。同「南泉と臨済——自由という言葉をめぐる——」『印度学仏教学研究』(三三―二) 一九七四年。がある。

(3) 注(一)に記載される論考参照

(4) 元版大蔵経『伝灯録』卷九末尾に収録される『伝心法要』のみ「百丈之子、西堂之姪」とする。大正大蔵経『伝灯録』の『伝心法要』はこれによったもの。これ以外のテキストは全て「西堂百丈之法姪」とされる。

(5) 宋本『伝灯録』卷六、百丈章に馬祖下の筆頭、西堂と百丈

が馬祖と月を愛でる因縁話で「経入(智)藏、禪歸(懷)海」と馬祖が二人を認める。しかし、『伝灯録』巻八、百文章(4080)等ではこれに南泉が加えられ「唯有普願獨處物外」と三大士角立の話に改変される。南泉のみ「普願」とされ明らかに違和感がある。尚、本稿で使用する東禪寺版『伝灯録』では三大士に改められている。

(6) 柳田、前掲書、二七三～二七四頁。

(7) 『宋高僧伝』巻一一 (T. 50. 775a) では「大隈山」

(8) 『宋高僧伝』巻一一 (T. 50. 775a) に記載があり、嵩山会善寺は河南省鄭州市登封市嵩山に位置する。『大明一統志』巻二九。もとは後魏の孝文帝の離宮であり、開皇年中(五八一～六〇〇)に会善寺の名を賜ったとされる。弘忍門下の慧安・淨藏が住した。趙州もこの戒壇で受戒した。『伝灯録』等では「嵩嶽」のみ。高律師について『宋高僧伝』のみに記載があるが、詳細は不明。

(9) 『宋高僧伝』巻一一 (T. 50. 775a) 「抉中百門觀之關鑰、領玄機が疏論之外(中百門觀の関鑰を抉るも、玄機を疏論の外に領す)」他の資料『伝灯録』巻八(117a)等では「入中百門、精練玄機(中百門に入り、玄機を精練す)」とただ学究に勤めた旨が記される。

(10) 『大明一統志』巻四九。『江西通志』巻一一一。宋代には能仁寺、明代には永寧寺、清代には祐清寺と呼ばれた。

(11) 『祖堂集』巻一五、帰宗章(572)「師久與南泉同道神彩奇異」同巻一六、南泉章(683)「師與歸宗同行二十年」とある。

他の同参の者より両者が絡む話が多く見られる。

(12) 自らの下に参じた者以外の機縁の話は管見の限り南陽慧忠(七七五)、魯祖宝雲(生没年未詳)、東寺如会(生没年未詳)、泐潭常興(生没年未詳)、百丈惟政(生没年未詳)が残されている。しかし、どれも正確に訪れたとは確定し難い。「南泉一円相」として『碧巖録』六九則(T. 48. 0198c-199a)にも収録される南泉、帰宗、麻谷が慧忠を訪れようとする話があるが、慧忠の没年は七七五年であり、まだ南泉は具足戒を受けていない。また、結局訪れなかったはずの南泉が慧忠を訪ね対話する話も残される。しかしこれも東寺如会とは同じ内容であり、収録時の誤りではないかと考えられる。魯祖・東寺は南泉と同じく馬祖下の禅者であり、これは行脚により兩人を訪ねたのか、馬祖下での話であるのか断定することは難しい。泐潭との話は『祖堂集』巻一四に収録される魯祖の話とは同じである。問われれば「面壁」するのは魯祖の手段であり編集時に間違つたものであると考えられる。百丈惟政との話は、百丈惟政自身が惟政、涅槃、法正、が別人であるのか、同一人物であるのか、また、馬祖下、百丈下どちらであるかの問題を孕んでいる。これに関しては、鈴木哲雄『唐五代の禅宗——湖南江西篇——』大東出版社、一九八四年、一四三頁～一四四頁に詳しい。この点を除いても、この問答自体疑わしい点が多い。

(13) 『宋高僧伝』巻一一 (T. 50. 775a) 貞元十一年拄錫池陽南泉山。堙谷刊木以構禪宇簞笠飯牛瀆

于牧童、斫山畚田種食以饒。足不下南泉三十年矣（貞元十一年、錫を池陽南泉山に拄く。谷を埋め木を刊りて以って禪宇を構え簍笠にして牛を飯い牧童に瀾り、山を斫り田を畚き種食、以って饒る。足、南泉を下らざること三十年）

(14) 『旧唐書』一六二卷列伝一一二、『祖堂集』卷一八、『伝灯録』卷一〇等独立の章を立てられる。

(15) 『宋高僧伝』卷一一 (T. 50. 778a)

(16) 『興隆仏法編年通論』太和五年。『仏祖歴代通載』太和九年。

『禪灯世譜』太和十二年

(17) 入矢義高・訳注 柳田聖山・解説『伝心法要・宛陵録』

『禪の語録八』筑摩書房一九六九年、一六四頁、「かりに瀉山靈祐と同年輩と推定すれば、大暦・建中のころ（七六六～七八三）の出生となる。」

(18) 現在の福建省福州市福清市、『大清一統志』卷三二五、『福建通志』卷六一。開創は貞元五年（七八九）、慧能の弟子 正幹（生没年未詳）が般若堂と称したものが初めとされる。その八年後貞元十三年（七九七）建福寺と号した。『宋高僧伝』卷二〇では「投高安黄檗山寺出家」と誤りが見られる

(19) 『伝灯録』卷九 (T. 386) では、ただ「因人啓発」とされる。

(20) 『祖堂集』卷一六 (612) 「後人伝説、此婆少年曾參見忠国師也（後人伝説すらく、此の婆少年にして曾って忠国師に参見せりと）」

(21) 『祖堂集』卷一七 (718) 臨濟章にのみ馬祖の下に参じたと
いう記述がある。

(22) 四庫全書本『江西通志』卷八「黄檗山在新昌県西一百里、山之絶頂有寺曰鶯峰（黄檗山は新昌県、西のかた一百里に在り、山の絶頂に寺有りて『鶯峰』と曰う）」

(23) 会昌二年（八四二）に「予会昌二年、廉于鍾陵、自山迎至州、憩龍興寺、旦夕問道」と『伝心法要』序に記されるように、裴休と出会い黄檗山から龍興寺へ移ったとされる。裴休との出会いについては前掲拙稿二〇一一年、参看

(24) 『宋高僧伝』卷一七 (T. 50. 817c) 楚南章

(25) 『江南通志』卷一七五、にも「大中三年裴休知宣州、迎居開元寺受法、創広教寺於敬亭南麓（大中三年、裴休は宣州を知り、迎えて開元寺に居せしめ受法し。広教寺を敬亭の南麓に創る）」とある。

(26) 『伝灯録』卷九 (T. 386a) 黄檗章等

(27) 『宋高僧伝』(T. 50. 822c) 『景德伝灯録』(T. 386a)、『伝灯録』(480a)、『五灯会元』(Z. 138. 123a) 等は大中年間（八四七～八五九）に示寂したとする。『隆興仏教編年通論』(Z. 130. 679b) は大中四年（八五〇）、『歴代編年釈氏通鑑』(Z. 131. 973b)、『釈氏稽古略』(T. 49. 839a)、『仏祖綱目』(Z. 146. 552b) は、大中四年（八五〇）八月、『仏祖統紀』(T. 49. 388b) は、大中九年（八五五）、『宗統編年』(Z. 147. 184b) は、戊辰二年、即ち大中二年（八四八）、『仏祖歴代通載』(T. 49. 638c) は「大中三年終於黄檗」（八四九）とする。

(28) 『伝灯録』卷一一 (190a, b 同様) 如敏章『宗門統要』卷四 (90a) 黄檗章等では、本稿「三」で考察する南泉と黄檗の

機縁に対する湧山の著語としてもこの語が使われる。

- (29) 『祖堂集』 卷一一 (418) 保福章。同、卷一五 (570) 東寺章
- (30) 『宗門聯灯会要』 卷三 (Z. 79, 34c) 慧忠章では「泊不到和尚此間」。慧忠と南泉の機縁は明らかに東寺のものと同じであり、作為的な移動であると考えられる。
- (31) 黄檗章の履歴を述べる項には、その偉丈夫な様についての記載が見られる。
- (32) これは『五灯会元』 卷四 (Z. 138, 8c) 黄檗章等で黄檗が百丈に初めて参じた時に爲した問答に付される「巍巍堂堂」という修飾語に通ずる。この語を加えることにより、身長のみならず堂々たる禅機を備えていることを示している。
- (33) 『伝灯録』 卷一一、慧林鴻究章、同卷二八、荷沢神会大師語・葉山惟儼和尚語、等にそれぞれ見られる。
- (34) 入矢義高 監修 伝灯録研究会 編 『伝灯録』 (三) 禅文化研究所、一九九三年、一一八頁
- (35) 『古尊宿語録』 卷二二 (Z. 118, 14b) 舒州白雲山海会法演和尚語録に「若人於此見得、日銷萬兩黃金。其或未然、草鞋錢教什麼人還(若し人、此に見得せば、日に万兩の黄金を銷す。其れ或は未だ然らずんば、草鞋錢は何麼の人をして還わしめん)」とある。
- (36) 道元の『正法眼蔵』 第三、「仏性」にもこの立場で詳しく取り上げられている。
- (37) 前掲拙稿二〇一〇年、参看。
- (38) この一喝であるが、『臨濟録』 行録 (T. 47, 50a) にも収録される黄檗と臨濟の応酬に入る維那の語、「維那近前扶云、

和尚爭容得這風顛漢無禮。黄檗纔起便打維那(維那、近前して扶けて云く、「和尚、争か這の風顛漢の無礼を容し得ん」。黄檗纔かに起つや便ち維那を打つ)」と通ずる。この場合、黄檗はその言を発した維那を打つ。

- (39) この他にも、『宗門統要』 卷四 (8b) 甘贄行者章に収録される話においても黄檗が南泉下で首座であったことが記される。尚、『伝灯録』 甘贄章では同話の人物はただ「上座」とされている。

- (40) 古賀英彦『訓注祖堂集』「研究報告」第八冊、花園大学国際禅学研究所、二〇〇三年、六五五頁「両者は龐居士の一件を前提にしていると考えてもよい」入矢義高『龐居士語録』 禅の語録七、筑摩書房、一九七三年、一一四頁―一一九頁。

- (41) 『伝心法要』 中でも分別の否定について「不曾生、不曾滅、不青不黄、無形無相…」と表現される。このように青と黄を全ての「色」の代表とすることは唐代禅者の常套の手法である。

- (42) 『伝灯録』では何を扣いたのか具体的な語はないが、他の資料では「師扣刀三下」となっている。

- (43) 『五灯会元』 卷四 (Z. 138, 9c) 黄檗章に黄檗が刀を三度扣いたという記述の後に「泉曰、大家擇菜去」と加えられる。また、『伝灯録』 宋本・高麗版本共に南泉の「只解作賓。不解作主」という語が無く、代わりに「大家扱菜去」とされ、黄檗が刀を三度扣く記述もない。南泉は黄檗が「举起刀子」したそのみで認めたことと取ることも出来、また黄檗を突き放

したとも取ることが出来る。しかし、他の機縁の話の『伝灯録』での評価を踏まえるならば前者であると考えられる。

(44) 『祖堂集』卷一六(886) 南泉章に大衆への言葉、『伝灯録』

卷八(1209) 南泉章等に収録される陸巨との問答でも同じく

「王老師罪過」で締められる話がある。

(45) 『宗門統要』卷四(91a) 黄檗章に「師云、可惜許」とあり、黄檗の発言であるとされるが誤りである。

(46) 入矢、一九九三年前掲書、では「惜しい！」というのはそ

の問いがこちらからの誘いによって導き出されたものであることを惜しむのであろう」(一一七頁)と黄檗の見処を部分的に賛じての句としている。

(47) 「羯鼓掉鞭牛豹跳。遠村梅樹背嘘都(羯鼓、鞭を掉るい牛、豹のごとく跳る。遠村の梅樹、背嘘都)と酬和している。

(48) それぞれ『祖堂集』卷一六、南泉章(802～803) 黄檗章(616～617)に記載される。

(49) 黄檗と百丈の機縁については、前掲拙稿二〇一〇年、参看。